



安全で楽しい川遊びを普及するために、流域の小中学校を中心に着衣泳などの安全教育を行なう「四万十川ガキ育成事業」の風景

case 06 普及啓発の事例
四万十川流域（高知県）

「最後の清流」とともにくらす

流域住民の手による地域の振興

高知県では、四万十川らしさを後世に引き継ぐため、2001年に「高知県四万十川の保全及び流域の振興に関する基本条例（四万十川条例）」を制定しました。条例制定以降、四万十川の生態系と景観の一体的な

主役は流域住民

これに加えて地域経済の発展に伴う生活様式の変化等もあり、「四万十川らしさ」を感じるために最も重要である、自然環境や景観の悪化が見られるようになってきました。

高知県西部を流れる四万十川は、その代名詞となっている「清流」、さらに「昔ながらの農山村の風景」が残されている川です。それがきっかけとなり、昭和50年代に四万十川ブームと呼ばれる現象があり、四万十川を訪れる人が増えました。

徳島県
愛媛県
高知県
四万十川流域

Profile

【課題】 地域振興
【主体】 高知県 四万十川
【連絡先】 高知県 高知県林業振興・環境部
環境共生課 四万十川・清流担当
☒ 030701@ken.pref.kochi.lg.jp

- ④ 四万十川すみずみツーリズムで行なわれている参加者の交流イベント
- ⑤ 学生キャンプでのフィールドワークの状況
- ⑥ 共生モデル地区に指定された黒尊川流域と大正中津川地区の景観



四万十川で地域をつなげる



四万十川流域の
文化的景観
Cultural Landscape of the
Shimanto river basin

- ① 国の重要文化的景観に選定された風景の一例
- ② 「四万十川流域の文化的景観」ロゴマーク
- ③ 四万十川流域6次産業化の成功例「栗の再生プロジェクト」。栗の生産から加工・商品化、流通・販売を行う



流域の魅力をいかした取組

いくこととしており、取組を通じて四万十川らしさや四万十川を中心とした生活が後世に引き継がれていくことが期待されます。

保全を目的に、環境配慮の指針策定や保全重点地域の指定等に取り組みました。一方、地域の少子高齢化が進み、活力低下や森林荒廃への対応など、地域の「振興」が課題となってきました。

2009年には、四万十川流域の景観が国の重要文化的景観に選定されました。これを機に文

化的景観を象徴するシンボルマークが作成され、景観の保全と活用の活発化に貢献しています。取組の一つの例に、「学生キャンプ」があります。これは、全国からの大学生の参加者が、地元住民とのふれあいとフィールドワークを通じて、四万十川流域の活性化に向けたアイデアを提案するというものです。

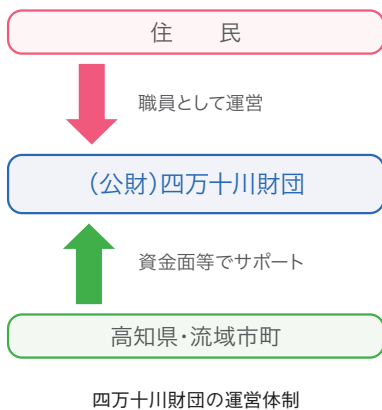
また、観光の振興と地域間交流を推進するために、上流から下流までの30以上の農家民宿、農家レストランによる「四万十川すみずみツーリズム」の取組があります。ここでは、観光客のニーズにあった民宿・レストランを紹介するネットワークの形成や、「道がわからない」という観光客の声に応える四万十川すみずみMAPの作成などの取組を行っています。観光客に四万十川流域をすみずみまで訪れてもらうことで、より広範囲の地域の活性化につながっています。

また、新たに農家民宿を始める方に対するお客様の迎え方のアドバイザー、上流域と下流域で提供されている食の相互体験など、観光を活性化させる取組も行われています。

流域マネジメント、ここが「鍵」

「鍵」その1 行政主導から 住民主導へ

行政と民間団体・住民の取組をつなぐ機能を持つ組織として「(公財)四万十川財団」を2000年に設立しました。財団では、文化的景観推進事業や四万十川ガキ育成事業等の取組を実施するだけでなく、環境学習の支援や清掃活動等の住民、民間団体が行う活動の支援も行っています。



四万十川財団の運営体制

この財団は、高知県と四万十川流域5市町が共同で出資して設立した組織です。立ち上げた当初は、高知県等からの出向職員で運営していましたが、民間団体の取組を積極的に推進・継続させるために、行政主導

から住民主導に切り替えました。住民公募の職員を徐々に増やし、現在は住民の職員のみで運営を行っています。行政は、資金面のサポート等を通じていますが、今後はさらなる住民主導の事業展開を目指して取組を進めています。

「鍵」その2 川とともに 人と自然の共生

四万十川流域において優れた水質や動植物の多様性、良好な景観を有し、人と自然が共生する地域を「共生モデル地区」に指定し、住民組織主導で保全と振興を推進する地域づくりに取り組んでいます。

この共生モデル地区には、現在四万十市黒尊川流域と四万十町大正中津川地区が指定されており、両地区とも透明度が高い水質を誇り、清流と天然林に囲まれた渓谷と昔ながらの農山村の景観が残っています。これらの景観は、国の「重要文化的景観」にも選定されています。

また、この豊かな自然環境の保全と地域振興の活動を住民組織が協働で話し合う会議を立ち上げ、地元住民が中心となって水辺林の間伐と間伐林を利用したもののづくりを行うイ

ベントや地域の食材を生かした料理を振る舞うイベントを開催し、地域の振興と自然との共生につなげています。

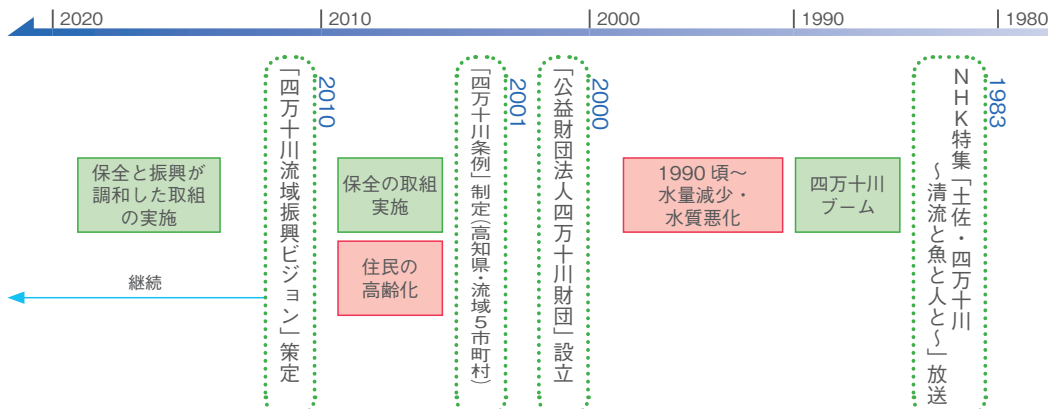
「鍵」その3 四万十ブランドの確立

四万十川流域では、産業の振興を図る目的で「6次産業化」が進められています。「6次産業化」とは1次産業の農林漁業と、2次産業の加工業、3次産業の販売業までの全てを地域の手で行うことにより、地域資源の付加価値を高めるものです。

四万十川流域における6次産業化の成功事例として「栗の再生プロジェクト」があります。四万十川流域は古くから栗の産地として栄え、普通の栗と比べてサイズが大きく、糖度が高いという特徴を持っています。これまでは出荷をすれば他地区の栗と混ぜられてしまいました。自ら加工・流通・販売を行い、四万十栗の良さを発信することで差別化を図り、「四万十の栗」の名前をブランド化することに成功しました。さらに、ブランド化により生産者に利益が還元され、流域が潤う効果も生まれています。

これまでの取組

四万十川流域は、1980年代の四万十川ブーム以降、生活様式の変化などにより「四万十川らしさ」が徐々に失われつつありました。財団の設立や四万十川条例の制定、四万十川流域振興ビジョンの策定により、環境保全と地域振興が調和した取組が行われています。

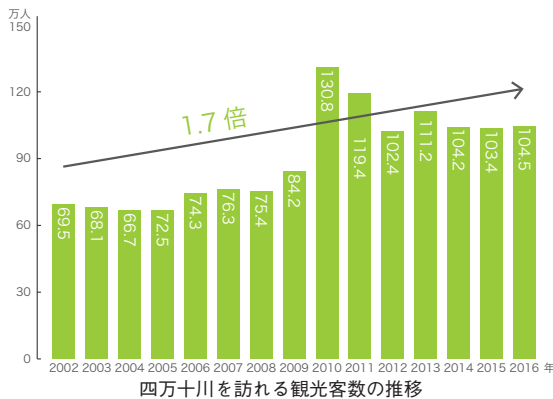


活動の成果

観光客が1.7倍

四万十川流域の清流と豊かな自然を目的に訪れる観光客が増加しています。

2016年に四万十市(旧中村市)を訪れた観光客は、2002年に比べ1.7倍に増えています。また、外国人観光客の増加も目立ち、2016年に四万十市を訪れた方は、2012年に比べ10倍も増えています。



川と人を守る
スペシャリストが活躍

毎年たくさんの観光・レジャー

客が四万十川を訪れます。その一方で、不運な事故や遊んだ後にゴミを残していく人たちもいます。そこで、この流域で暮らす方々が「四万十リバーマスター」となり、川遊びのポイントやルール、危険な場所を教えたり、環境保全のアドバイスをするなど、自主的な活動を続けています。

2001年から

始まったこの活動は、2018年時点では、88人の方が登録され、四万十川と人を守り続けています。



リバーマスターとしての活動状況



「四万十リバーマスター」
ロゴマーク

Key Person



【四万十ブランドを販売】

株式会社四万十ドラマ 代表取締役
あぜち りしょう
畦地 履正さん

略歴 株式会社四万十ドラマの代表取締役として「shimanto おちゃくり cafe」など3つの自社店舗の運営を行いながら、「栗再生プロジェクト」にも中心メンバーとして関わる。地域資源の生産現場を保全しながら、活用し、生まれた商品が戻ってくる「地元発着型産業」のトップランナー。



四万十町内外にある自社店舗の売りはなんですか？

四万十川の自然にこだわった商品を取り扱い、特に「しまんと地栗モンブラン」や「しまんとロール紅茶巻き」など栗やお茶を使った商品の開発・加工・販売を行っています。これらの品は、〈ローカル〉〈ローテク〉〈ローインパクト〉をコンセプトに「四万十ブランド」として販売しています。

〈ローカル〉とは、四万十川を共有財産に足元の豊かさ・生き方を考えるネットワークを構築することです。

〈ローテク〉とは、農林漁業に生きづく技術や知恵や第1次産業にこだわったものづくりをすることです。

〈ローインパクト〉とは、四万十川に負荷をかけない風景を保しながら活用する仕組みをつくることです。

「四万十ブランド」をつくり上げるためにとくに注力されたことは？

事業を展開するまでの土台づくりが大変でした。この地域に何があるのか、どんなものをつくっているのか、どんな思いがあるのかという調査に3~5年をかけました。どこの地域でも掘り返せばその地域の「売り」は絶対にあります。見つけ方といかし方、あと売り出し方が重要！

地域を活性化させようという取組の中で重要なことは？

行政と民間が同じ方向を向いた上で、地域の人たちが潤い、若い人が後に続いていける仕組みをつくるのが重要です。そのため地域の方々を積極的に雇用しています。また、取組はコンセプト・考え方がしっかりしていないといけません。キーマンとなるべきモチベーションのある「人」を育てることもポイントです。